インサロフ。 探偵だとも。トルコの政府に頼まれて、吾々國事犯人の跡をかぎ付けて歩いてゐる奴だ。いつまでもこんな所にぐづぐづしてゐると、あんな奴のためにとんだ恥辱をうけなければならない。それにしても早くレンヂッチが來てくれればいいなあ。

エレエナ。 夜が明ければ來ますよ。あんまりいらいらしないで、——ああ昨夜新聞が來てゐました。それから母あさんから手紙が屆いてをりますわ。

インサロフ。 ああ、さうかい。何と言つて。

エレエナ。 いろいろのことが書いてあるけれど、寂しくて寂しくてしやうがないといふことですわ。それでせめて一日でもいいから私にモスクワへ歸つて來いといふのです。

インサロフ。 さうだらうね。ほんとうに母あさんには申譯がないのだから。お父うさんは——

エレエナ。 相變らず遊んで歩いて、時々家へ歸つて來ては母あさんを困らしてゐるやうですわ。それにベルセネフさんもシユウビンもみんなゐなくなつたのですから、きつとあの大きな屋敷の中は火の消えたやうになつてゐるでせう。——それはさうと一つおもしろいことがあるんですよ。書記官のクルナトウスキイ、ほらあたしのお婿さんにするつて父うさんのさわいだ人が、小間使ひのゾオヤと結婚したんですつて。

インサロフ。 ゾオヤと——あのドイッ種のお茶つぴいと——可笑しなものだね。

エレエナ。 ちやうどいい似合ひの夫婦ですわ。——でもほんとうに母あさんだけはあたし氣にかかつてしやうがないのですよ。そのせゐだかこのごろは毎晩のやうに夢に見るんですよ。

インサロフ。 たつた一人の母あさんに悲しい賴りない思ひをさせた、それだけでも私達は罰せられなければならない。エレエナ、私の仕事が九分九厘まで出來

上がつてゐながら、こんな風にして妨げられてゐる、それをほんとうに天罰だとは思はないかねえ。

エレエナ。 また愚痴が始まつたわねえ。何事も運命ですわ。私達二人がかうして愛し合つた。短くも長くもかうして幸福を樂んだ。それがどうして惡いでせう。それがためにどうして私達は罰せられなければならないでせう　神樣は人間に幸福を與へることを嫉むものでせうか。

インサロフ。 けれどエレエナ、私達がかうして幸福を得るためには隨分多くの人が不幸を悲しまなくてはならなかつたのだ。

エレエナ。 母あさん、父うさん、ベルセネフ、――けれどシユウビン、それからあの書記官のクルナトウスキイ、――まあ馬鹿々々しい、あんな人達の幸福まで私達は考へ出してやる暇はないでせう。

インサロフ。 とにかく私達の幸福のさう長くないことだけは覺悟してゐなくてはならない。

エレエナ。 それは覺悟してゐますわ。あなたが死ねばあたしも御一所に死にますわ。けれどお互ひにこんな薄ぐらいかび臭い室で死にたくはないでせう。

インサロフ。 だから一刻も早く本國へ歸りたいのだ。一度でも本國の戰場の土を踏んで死にたいのだ。

（沈默。戸外は風劇し。絶え入るやうな汽笛。）

エレエナ。 また風がひどくなつて來た。（と言ひ乍ら窓のカアテンをあけて外を見る。朝の光窓より入り込む。）　ああひどい嵐だこと。海の上はまつ白に浪が立つてゐる。

インサロフ。 エレエナ、レンヂッチは來ないなあ。

エレエナ。 もう直き來るでせう。けれどこの大嵐ではどうして船が出せるでせう。

インサロフ。 そんなにひどい嵐かい。

エレエナ。 ええ、まるで沖にゐる船が、木の葉のやうに浮いたり沈んだりしてゐ

ます。汽船があの通り非常汽笛を鳴らしてゐます。

インサロフ。ああ、ああ。

エレエナ。あなた、あなた、後生だからそんなに氣を落さずに、落着いて運の開けるのを待つてゐませうよ。

インサロフ。落着いてゐられるだらうか、落着いて待つてゐられるだらうか。本國にゐる吾々の同志はもう一刻の猶豫もなく私の歸國を待つてゐるのだ。私が歸らなければ彼等は何をすることもできない、失望してちりぢりばらばらに解散してしまう外はない。そして殘忍なトルコの役人の手に一人々々捉へられて、恐ろしい虐殺を忍ばなくてはならない。それはまだ忍ぶとしても、かうして折角芽をふきかけた吾々の事業が、嫩葉のうちに跡もなく踏みにじられてしまつたら誰がこれを繼ぐものがあらうか。ブルガリア人は永劫にトルコ政府の惡虐の下に亡びて行く外はないのだ。

エレエナ。あなた、そんなに興奮してはいけないのですよ。まあ、こんなに汗をかいて。（額の汗をぬぐひ乍ら）大變熱があるやうよ。いけないんですよ。少し床に入つて休んでいらつしやい。お醫者を呼んで來ませう。

インサロフ。醫者なんぞには及ばない。ここにかうして少しじつとしてゐれば直つてしまふ。朝飯がすんだらまた二人で散歩しよう。心配することはない。

エレエナ。ええ。ではあたし、いい工合にしてあげますから少し氣樂にお休みなさいな。ね、いいでせう。（安樂椅子のうしろへ自分の椅子をうつして夫の頭を抱くやうに腕を頭の下に敷いてやる。）さあ少し、お休みなさい。

インサロフ。ありがたう、いい工合だ。レンヂッチが來たらおこして下さい。あの男が船の用意さへしてくれれば、少し位の風でも直ぐに立つ。いろいろ荷造の支度もしなくてはならない。

エレエナ。荷造位直ぐに出來ますわ。

インサロフ。 とにかく早く支度をしなくてはならない。（眼を瞑る。）

エレエナ。（男の額髪を撫でながら。）ほんたうに勞れきつていらつしやるのだわ。——まあひどい嵐だこと。どうしてこの嵐に船がでるものぢやない。——まあ、こんなに痩せて、何といふやつれかただらう。これで生きてゐるといふことが不思議にも思はれる。昨夜も今朝もしきりに私の病氣は天罰だと仰しやるけれど——私達の幸福が、どうしてそんなに神樣の前に惡いことなのだらう

——

インサロフ。（譫言のやうに。）レンヂッチ。レンヂッチは來ないなあ。

エレエナ。 いいえ、まだ——

インサロフ。 ああ、ああ。

エレエナ。（男の額に手をあて乍らほろほろと涙を落す。やがてこちらへかれたやうにハンカチで眼をおさへ椅子の上に俯伏しになる。うとうとする樣子。）

そのの前夜

第五幕

（長い沈默がつづく。）

インサロフ。（嗄れた聲で。）エレエナ。エレエナ。（と呼び乍らいきなり起き上る。眼と口を大きく見開いて痛ましい垂死の表情。）

エレエナ。（はつとし乍ら。）え。（と言つてじつと男の顏を見つめる。）

インサロフ。（つと女の手を荒く掴む。）エレエナ、エレエナ。レンヂッチは來ない。——だが私はもうだめだ、もうだめだ。

エレエナ。 どうして、どうして。

インサロフ。 一切がだめになつた。私は死ぬ。私は死ぬ。

エレエナ。 そんなことがあるものですか。

インサロフ。 何といつてもだめだ。私には分かつてゐる。エレエナ、私が死んだら、せめてこの身體だけでもブルガリアの土に埋めて下さい。レンヂッチに頼んで下さい。——エレエナ、やはり短かい幸福だつた。（仰向に倒れる。）

エレエナ。（消え入るやうな聲で。）あなた、あなた、しつかりして。（夫の身體にとりすがる）

ああ。ああ。（絶叫する。）

（この刹那、船頭レンヂッチ幻のやうに扉口に立ち現はれる。）

エレエナ。ああ、レンヂッチ？

レンヂッチ。奥さん。（默つて手をにぎる。短い沈默。）

エレエナ。インサロフは今までどんなにあなたを待つたでせう。

レンヂッチ。（默つてインサロフの傍に寄る。）アアメン。（十字を切る。）殘念でした、奥さん。

エレエナ。レンヂッチ、私もこの人の身體と一所に、海を越して向ふ岸まで渡して下さいな。ね、いいでせう。

レンヂッチ。さやうさね。隨分面倒だが、やつて出來ないこともないでせう。癪にさはる役人共と喧嘩をする覺悟なら。——だがそれはまあどうにか無理に

も運ばせるとして、首尾よく旦那を向ふ岸の土へ埋めた跡で、あなたの身體をどうしてこちらへ送り返したものかしら。

エレエナ。私の身體なんか送り返してくれなくてもいいのですよ。

レンヂッチ。え、ではあなたはどうなさるおつもりですね。

エレエナ。さあ、何處へどうなるでせうか。南へ行くか、北へ行くか、私にも分からない。——それよりかまあ連れて行つて下さい、連れて行つて下さい。

レンヂッチ。分かりました。ではそのつもりでやつて見ませう。それまでさようなら。（去る。）

エレエナ。さようなら。（そのうしろ影を見送つたまま、化石したやうに立つ。眼には涙を一杯ためてゐるが、顔面の表情は彫刻のやうに動かない。やや長い沈默。）私はやはり一人だつたのだ。（この時寢室の高窓から朝の光射し入りてインサロフの死顔を白く照らし出す。エレエナふとその方へ吸はれるやうによろよろとよろけかかる。）やはり一人だつたのだ。——

（けたたましい鴫の羽音。海鳥の叫び。
遠く非常汽笛の聲。）

幕

『その前夜』初演の主なる役割

——大正四年四月二十六日より三十日まで東京帝國劇場に於て

娘　エレ・エナ	松井須磨子
ブルガリア人　インサロフ	武田正憲
彫刻家　シユウビン	住田良三
大學生　ベルセネフ	田中介二
父　スタホフ	勝見庸太郎
老人　ウワルたちさん	中井哲
書記官　クルナトウスキイ	田邊若男
船頭　レンヂッチ	中田正造
母　アンナ	澤井嘉枝
召使の少女　ゾオヤ	花柳春美
乞食の少女　カアチヤ	明石澄子

その他略す

——その前夜了——

大正四年五月十一日印刷
大正四年五月十五日發行

（定價金七拾錢）

脚色者　楠山正雄
東京市牛込區矢來町中の丸

發行者　佐藤義亮

東京市牛込區矢來町中の丸
發行所　新潮社
電話（番町）二、二二三番
振替（東京）一、七四二番

脚本　そ の 前 夜

不許無斷興行

印刷人　東京市麹町區飯田町二丁目五十番地　佐々木餞一

印刷所　同所　秀光舍

右

8.10.15

83 49

357
51

終